

子宮頸がん

子宮頸がん予防ワクチンについて

◆「子宮頸がん」とはどんな病気

子宮の入り口付近にできる「がん」です。

近年では、20代後半から30代の若い女性の発症が増加傾向にあります。

初期段階では自覚症状はほとんどなく、がんが進行すると月経とは関係ない出血やおりもの変化があります。

早期に発見されると、手術で一部を切り取るだけですみ、日常生活にはほとんど影響がありませんが、進行すると子宮を摘出するため出産が望めなくなったり、排尿障害などの後遺症が残る場合があります。

◆子宮頸がんの原因

ヒトパピロウイルス(HPV)という、皮膚や粘膜などに常在するウイルスに感染することで発症します。

感染ルートは主に性行為であることから、性体験のある男女のほとんどが感染しますが、多くは免疫力で自然に消えます。

発がん性の高いウイルスに長期に渡り感染することで、細胞が「がん化」します。

HPVは100種類以上の種類があります。そのうち15種類が子宮がんの原因となることが多いとされ、中でも16型と18型は悪性化のスピードが速く、がん化しやすいと言われています。

◆ワクチン接種の効果

ヒトパピロウイルスの中でも発がん性の高いHPV16型と18型の感染によるがん化を、ワクチンの接種によって予防します。

他の型のウイルスによってもがん化する可能性があるため、子宮頸がんになることを完全に予防できるものではありませんが、20代から30代の発症の60%を予防できるとされています。完全に子宮頸がんによる死亡を防ぐためには、ワクチンの接種とともに、20歳からの子宮頸がん検診の受診を継続することが重要です。

◆対象年齢

WHOでは性行為を経験する前の10歳以上の女性に接種することが望ましいとしています。

◆ワクチン接種のリスク

ワクチンを接種した後は、注射した部分が痛むことがあります。注射した部分の痛みや腫れは、体内でウイルスの感染に對し防御する仕組みが働くために起こるもので、通常は数日程度で治まります。

妊娠中の方への接種は胎児への安全性が保障されていないためお勧めしていません。

重い副反応として、まれに「じんましん」「呼吸困難」「血管浮腫」といったショック症状が起こることがあります。過去に薬剤等のアレルギー反応のある方は、医師にご相談ください。

◆ワクチンの接種方法

肩に近い腕の筋肉に注射します。

十分な免疫効果を得るためには、半年の間に3回接種します。

2回目の接種は初回から1ヵ月後に接種し、3回目の接種は初回から6ヵ月後に接種します。

◆接種費用

女子中学生以外の方は、医療

機関により、接種費用が異なります。(1万5千円から2万円) 助成対象者以外で接種を希望する方は、医療機関へお問い合わせください。



子宮頸がんは、ワクチンを接種することで予防できる唯一のがんです。

若い女性に増えている現状を重く受け止め、効果の高いとされる女子中学生を対象に、町の公費助成を左記のとおり実施します。